慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160—8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分〜午後12時　午後1時〜午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

医学部100年・新病院棟建設に向けて

新病院棟1号館完成予想図

社中一丸となるとき！

2014年5月、新病院棟となる1号館の地鎮祭が行われ、本格的な工事がスタート。新病院棟建設に併せて発足された医学部募金戦略会議（議長：戸山常任理事）、三四会新病院棟募金委員（末岡委員長）を中心に、さまざまな募金活動を推進しています。慶應医学部新聞では、新病院棟建設の進捗状況などを報告すると同時に、募金活動についても、できる限りわかりやすく伝えていこうとしています。今号では、清家塾長、戸山常任理事、末松医学部長、竹内病院長から新病院棟建設および募金に関するご寄稿をいただきました。医学部のみならず、慶應義塾全体としての取り組みなども、お知らせしていきます。

三四会員の皆様へ さらなるご支援のお願い

塾長　清家　篤

みなさまには、平素から慶應義塾大学医学部・病院に対して、一方ならぬご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

みなさまのご協力のおかげをもちまして、信濃町キャンパス内の「臨床研究棟」「3号館(北棟)」「3号館(南棟)」の3棟が2012年までに竣工し、既に稼動しております。これらの施設は先の慶應義塾創立150年記念事業の一環として整備され、慶應医学の今後の発展のための基礎が築かれたと考えております。

そして、2017年に医学部が創立100年を迎えるにあたって、その中核事業と位置付けられる新病院棟（1号館）の建設事業がいよいよスタートいたしました。今年5月に地鎮祭を挙行し、その後工事は順調に推移しております。1号館I期棟の竣工は来年夏を予定しており、渡辺新病院棟建設企画担当教授を委員長とする新病院棟建設実行委員会が企画立案し、戸山常任理事を議長とする病院経営ボードで承認された計画にもとづき、さらに患者さん本位の医療を行うべくリニアック等を使用する放射線治療部門やCT・MRIなどの放射線診断部門、生理検査部門や一部の外来・病棟部門などが配置される予定です。

I期棟の竣工後は、引き続き老朽化した施設の解体や病院機能の移転を行いながら1号館II期棟の建設を進め、2018年春頃の竣工を目指してまいります。その後も1号館を中心にさまざまな病院機能等の移転・再編を進め、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年の春頃までには全ての工事を完了させたいと考えております。

このたびの事業は、患者さんへより質の高い医療環境・医療サービスを提供することを目的とするのは言うまでもなく、慶應医学の礎である「基礎臨床一体型」の医学の更なる進化とグローバルな視野を持った医療人育成のためにも必要不可欠な事業であり、我々はこれを着実に推進していかなければなりません。

すでにご承知のことと存じますが、本事業を実現するために必要な資金は300億円を想定しております。慶應義塾といたしましても、これまでに準備してきた自己資金に加え、大学病院を中心とする継続的な収支改善による資金積み立てに取り組む一方、昨年1月にスタートした新病院棟建設事業募金（目標額：100億円）へのご協力を広くみなさまにお願いしている次第でございます。

募金につきましては、1年9ヶ月が経過した現時点で、目標額の半分のところまでお申し込みを頂戴することができました。これはひとえにみなさまのご理解とご協力の賜物であり、この場をお借りしまして心から御礼申し上げます。

おかげさまで募金はこのようにひとまず折り返し点は通過しましたが、いまだ道半ばであり、これからいよいよ正念場を迎えます。慶應義塾では西室評議員会議長を委員長とする募金委員会が中心となって、さらに強力に募金活動を推し進めてまいります。三四会におかれましても、募金活動の端緒を開いて下さった比企前三四会会長・連合三田会会長から武田新会長にバトンが渡り、新たな体制の下、三四会のみなさまにさらなるご理解とご支援を呼びかけていただけるとの力強いお言葉をいただいております。みなさまのご協力なくして目標の達成は有り得ません。まさに慶應義塾社中一体となって、2018年3月の募金期間終了まで全力で取り組んでまいります。

これまでの募金活動を通じて感じられるのは、ご寄付くださったみなさまの本事業に対するご期待の高さです。慶應義塾が今後どのような医学・医療を実現しようとしているのか、それらはどのような形で社会に還元されるのか、大いに注目されています。我々といたしましても、こうしたご期待に応えられるよう、そしてお預かりしたご厚志を有意義に活かせるよう、懸命に取り組んでいく所存ですので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、三四会のさらなるご発展とみなさまのますますのご健勝を心からお祈り申し上げ、ご挨拶の結びとさせていただきます。

慶應医学百年に向けて
—新病院棟建設事業募金へのお願い

慶應義塾 常任理事　戸山　芳昭（整54回）

今年、慶應義塾は創立156年を、医学部では97年目を迎え、創立百年まで残すところ3年となりました。信濃町では平成24年4月に3号館南棟が竣工し、同年8月から予防医療センターや腫瘍・免疫統括センター、PETセンター、そして病棟（全個室）などが全面稼働致しました。まだまだ解決すべき課題は多々ありますが、何とか順調に滑り出したようです。関係者の皆様の御尽力に対し、改めて感謝申し上げます。

しかし、医学部・病院にとっては何と言っても2017年医学部創立百年に向けての新病院棟建設が最大目標であることに変わりありません。新病院棟を中核とした〝世界に冠たる大学病院〟の構築を目指し、塾、信濃町が一体となって本格的に動き出しております。本事業は塾にとっても、資金調達を含め極めて大きなプロジェクトであります。本年5月には地鎮祭が行われ、現在1号館I期工事が来年夏頃の竣工を目指して急ピッチで進められています。

本事業は既にご承知の通り、総工費300億円を予定しており、その1/3の100億円を募金で集めることになっております。募金期間は平成25年1月より平成29年3月末で、募金委員会の委員長には塾評議員会議長の西室泰三氏が就任しております。この様に全塾を挙げての募金活動でありますが、是非とも三四会の皆様には、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様には、義塾創立150年記念事業で御寄付を賜り、加えてこの度の重ねての御寄付のお願いとなり、大変申し訳なく思ってはおりますが、100億円の募金無くしては到底新病院棟建設は実現されません。義塾創立150年時には未だ新病院棟建設がはっきりしなかったため、御寄付を躊躇されていた先生方も多かったかと思いますが、新病院建設が正式に決定し、現在、I期工事の基礎部分が終わり、免震装置も設置されました。II期工事竣工の2018年春を目処に着実に動き出しておりますので、どうか三四会の先生方には、引き続きの御支援、御協力をお願い申し上げます。

御寄付を賜りました先生方の御芳名は、「芳名録」に記し、末永く慶應義塾の歴史に留めさせて頂くと共に、一定以上の御寄付を頂いた先生方には信濃町キャンパス内に銘板を作成し、御芳名を掲げさせて頂きます。また、先生方への感謝の気持ちとして記念バッジもお贈りしております。募金状況ですが、この9月26日現在、企業から40億円弱、塾員・一般の方々から7億円弱、そして三四会員から個人と法人を併せ6億円強、総額52億円強となっております。募金開始から1年9ヶ月が経過しましたが、ようやく折り返し点を過ぎたところです。未だ道半ばです。これからが正念場と心得ております。

三四会の皆様方には募金100億円の内、30億円を予定しております。以前、三四会新聞に慶應義塾創立125年時での新棟（現2号館）建設事業募金に関して記載したことがあります。この時は、現2号館の総工費120億円の内、三四会員からは個人が2962件、約21億円、法人が303件、約16億円、総額で何と総工費の1／3弱に当たる約37億円を集めて頂きました。

今回の事業はその上を行く規模であり、正に慶應医学始まって以来の大事業であります。医学部創立百年に向け、そして次の百年に向けた事業と位置付けております。この新病院棟建設無くして、慶應医学次の百年はありません。世界に冠たる慶應医学の構築も成し得ません。

最終的に、信濃町キャンパスには医学部創設以来慶應医学が進めてきた基礎医学と臨床医学の融合に加え、予防医学が加わり、さらには医学部と薬学部、看護医療学部、理工学部が一体となっての学生教育と基礎—臨床一体型研究、そして高度先進医療を提供する新たな慶應大学病院が誕生するはずです。これぞ、世界に向かって誇れる慶應医学の構築であり、優れた臨床医が慶應から多数育ってくれるものと信じております。

どうか三四会の皆様方には、本事業に御理解を頂き、御支援を賜りますよう重ねてお願いする次第です。慶應医学発展のため、母校のため、将来有望な若手医師のため、後輩のため、医学生のため、全ての教職員の皆さんのため、そして、患者さんのために……、新病院棟建設事業へのご支援を宜しくお願い致します。

「異端と先導」を実践する
医学部100回生の育成を目指して

医学部長　末松　誠（医化62回）

ご存知のように2017年の医学部創立100年に向けて「世界に冠たる総合医学府の構築」を目指して全塾レベルでの寄付活動を進めております。周年寄付事業が開始して実質1年半が経過しましたが、医学部のご出身の先生方のみならず、多くの塾員の方々や多数の企業の皆様からのご寄附のおかげもあり目標の半ばに到達することができました。この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

来年平成27年度の新入生は「医学部100回生」になります。創立90年を迎えた7年前から信濃町キャンパスは内部の財務改革を急速に進め、無給医の解消、助教有期制、大学院博士課程への大型奨学金制度による塾内外の優秀な人材の確保に努めてまいりました。また旧来の教室・部門の再編・見直しを進め、医学の根幹をなす縦割りの学問体系は維持しつつ、共同研究体制や新しい医療ニーズを満たすために必要な「多部門の連携による水平型俯瞰組織」であるクラスター部門を創設してまいりました。

おかげ様で診療報酬改定のあった平成22年度よりも一年前の平成21年度に医学部・病院の帰属収支が黒転し、以来医学部・病院が一体となって同収支黒字を維持しております。狭小なキャンパスで行う病院建設には研究スペースの制限や学生のアメニティ改善などの課題も山積しておりますが、部内も一丸となってご寄附をいただきました皆様の期待に添うべく新病院棟建設のローリングを凌いでまいります。

来年からは塾員の方からの高額のご寄附と医学部教授会の研究費獲得のオーバーヘッドなどの運用によって得られた年総額8000万円の奨学金によって優秀な学部生を育成する新奨学金制度がスタートします。「昔の適塾のように全国の俊英が集い、世界に飛翔する」人材を育成するべく一層の努力を致します。

その目標を達成するためには何よりも三四会の皆様からの一層のご支援が必要です。何卒さらなるご協力をいただければ幸甚と存じます。宜しくお願いいたします。

新しい信濃町キャンパスの誕生に向けて

病院長　竹内　勤（内59回）

三四会員の皆様には、日頃から新病院棟建設へのご理解とご協力を賜り誠に有り難うございます。この場をお借りして感謝申し上げます。

6月号の医学部新聞紙面でご案内の様に、平成26年5月12日、旧6号棟跡地に於きまして、新病院棟建設に向けた地鎮祭が無事執り行われました。これを機に、新病院棟のI期工事が本格的にスタート致しました。このI期工事部分は、新病院棟（1号館）南側の地下1階、地上6階部分に相当し、ここには、放射線治療、放射線診断、内視鏡センター、外来・入院病棟の一部などが整備されます。来年、すなわち平成27年の7月竣工を予定しております。この後、中央棟北棟からこのI期工事部分へのローリングが完了次第、いよいよこのI期工事部分の北側にII期工事をスタートさせ、平成30年春にはI期・II期部分からなる地上10階建ての「1号館」新病院棟が完成する事となります。信濃町駅からのアプローチ部分を含めた完成を平成32年春に目指しており、この年の夏開催されます東京オリンピック・パラリンピック前にフルオープンの予定です。

教職員一同、心を一つにして『世界に冠たる大学病院』を合言葉に新病院棟建設の準備を進めて参りました。すべての医療チームが結集したクラスター診療の実践、基礎・臨床一体型医療に基づく国際医療拠点の創設、都市型地域医療の推進、医看薬連携によるグローバル人材育成を4つの大きな柱に掲げ、新病院棟1号館を中核とした新病院群と医学部が有機的に連携した信濃町キャンパスに向かって前進しております。医学部100年の節目にあたってこの新病院棟を建設する事は、次の100年の新たな伝統作りの基盤となるものであると認識しております。法人による力強いご支援はもとより、病院収益を病院建設資金の一部に充て努力して参りますが、皆様からのご寄付がなければ新病院建設は現実のものとなりません。医学部100年の伝統を築かれてきた三四会員の皆様には、これからの新たな伝統作りのために是非ご支援賜りたく存じます。何卒、宜しくお願い申し上げます。

新病院棟1期棟建設工事 最新の進捗状況

本年9月末時点での新病院棟（1号館）1期棟新築工事の進捗状況をお知らせします。

1期棟は旧6号棟跡地に建設中です。基礎工事に続き免震装置の取り付けが完了し、その上階にあたる地下1階部分のコンクリート床がほぼ完成しました（図1）。建物東側（中央棟側）では地上6階に向かってコンクリート柱や鉄骨の組み立て作業が始まり、いよいよ建物の姿が見えてきました（図2）。

この様に2015年7月の竣工に向けて1期棟建築工事がスケジュール通りに進行中です。

（新病院棟開設準備室長　渡辺真純　64回）

図1：中央棟側から見た建設現場。クレーン車の下に地下1階部分が見える

図2：奥に見える中央棟側から上階に向けて建屋の組み立てが進んでいる

シリーズ「募金の声」
寄付金慣れしていない私が寄付を実践した顛末

けいゆう病院院長　永田　博司（56回）

寄付するモチベーションは慶應病院で診療したことがある人なら誰でもあるでしょう。トイレが隣室と共用ですきま風の吹きすさぶ7号棟の個室。差額をいただくのも気が引ける。とっくに建て替えなければいけなかったことは皆承知。病院の収益だけでは建築費を賄えないことも共通認識。医学部長には、「150周年とかで何に使われるか分からないのに寄付する気はないが、新病棟の具体的な建築予定と予算が公表されれば寄付するよ」と宣言はしていた。が、さて実際に寄付行為を実行しようとすると最初の一歩がでない。振り返ってみると、長年お世話になっている慶應義塾に寄付したことはほとんどない。慶應高校が久しぶりに甲子園に出場したときに一万円を振り込んだのと、連合三田会のパー券を捌けずに被った分くらいか。要するに慶應の卒業生は寄付慣れしていないわけだ。それに比べると、愚息がお世話になっている大学からは寄付の依頼がしょっちゅう来る。このときどこの口座から幾らくらい払うか予演会をしておけばよかったのだが、「今回は、しかとしよう」とずっとパスしていた。しかも母校への寄付なんだから自分で工面しなさいと女房から突き放された。原稿料等を細々と貯めた自分のお小遣いの口座に、寄付する様の金額は何とか貯まったが、これまでATMから旅費等を振り込む程度のことにしか使っていない。新棟建設の寄付にはATMからの振込は使えない。自慢ではないが、銀行や郵便局に振り込みに行ったことなど一度もない。学会費の振込等は秘書さんにお願いしていたし、一家の会計は女房任せ。前年に届いていた寄付ご案内の封筒を探しだしてみると、「寄付金自動払込」なる書類がある。銀行に出向かなくて済むのでこれは便利と記入を始める。しかし銀行へのお届け印を押す欄があり、はたと困った。自分の口座はうん十年前にパートで勤務していた銀行の診療所で、給与を振り込んでもらうため開いたもの。銀行というのは凄い。従業員に給与を支払っても、自分の銀行に振り込ませれば預金は減らないのだから。このとき、どこかで都合した三文判を使って通帳を作ったはずだ。引き出しを引っ繰り返すと、怪しげな三文判が1本でてきた。これが通帳の届け印かは確信がない。しかも切手不要の慶應義塾基金室行封筒の差出有効期間が切れていることにも気づく。たいした問題ではないが、だんだんと寄付する気持ちが萎えてゆく。結局、寄付関係の書類はファイルケースに塩漬けとなった。最終的きっかけは、キャッシュカードの紛失。これを軽く酔って帰るタクシー内に財布ごと落とした。女房に大目玉を食らい、夜中にコールセンターに電話してカードを使用不能にしてもらった。さすが、世界に誇る善意と良心の日本人、翌日にはタクシー会社の事務所に財布とカードが戻ってきた。カードを再使用するためには銀行の窓口へ本人が行かねばならない。ここで何たる天の配剤か、翌々日が病院の創立記念日。平日に銀行へ行くにはこの日しかない！

寄付金を振り込むのもこの日しかない！と一大決心して駅前の銀行支店へチャリンコで乗り付けた。案内嬢に導かれ、整理券をとって、おどおどと窓口へ向かい、通帳と印鑑を差し出すと「あ、これ印影が違いますね」。危惧したとおり印鑑は違っていた。文房具屋で三文判を調達して支店へとって返す。「ついでに、振込も。母校への寄付なんです」なんて余計なことを言ってしまう。「寄付ですか、わあ凄い金額ですね」と言われ、（ゼロの数を間違えて一千万円台の金額を書き込んでしまったか？）（いや、口座にそんなに金はないから、払いすぎることはないはずだ…）と冷や汗をかく。これから払込用紙に記入する方にちょっとご注意。右側の振込依頼書の金額欄は、枠のなかに「円」が記入されている。ここに「0」を記入し忘れると、桁がずれてしまいます。最近の案内では、クレジットカードでの寄付が可能となったようです。これで寄付行為へのアクセスの問題が解決されるのでは。しかしまだ寄付は足りないようです。最終兵器としては星取り表か？○○回生は45勝60敗、××回生には負けるな…、なんてことはやりたくないが。

鑑往知来

当院は2012年よりISO9001の認証を受け、医療の質の向上を目指してきた。医療の質とは診療の質、職員の質、経営の質も含む広い概念とされる。これらを実践する中で基本となることが、プロセス指向とPDCAサイクル→Plan（計画）Do（実施）Check（確認）Act（処置）である。プロセス指向とはたとえば、検査・与薬など手順をProcess Flow Chart（PFC）を作成し5W1Hを文書化する。そうすることにより手順内容が明確になり標準化される。万が一不具合（ヒアリハット）が生じた場合PFCを見直し、不具合の原因を検討しPFCを変更する。不具合を個人の責任とせずシステム変更することにより対応し「医療の質をシステムで保障する」。このようにPDCAサイクルを常時回すことによりスパイラルアップを計り医療の質の向上を計る。年に3回職員相互に違う職場の内部監査を、また年に一回外部審査委員による外部審査が行われ、PDCAサイクルが適切に回されているかどうかの審査が行われる。さてISO9001導入後2年間の感想であるが、①PFC②内部監査③今後の課題3点に関して触れてみたい。

①基本となるPFCであるが、どのような業務にしろ、いざ作成してみると5W1Hを正確に作成することは容易なことではない。逆にどれだけ今まで曖昧さの中で業務が行われてきたのかということを痛感させられる結果となった。②内部監査により違う職場の仕事を職員お互いに理解し合うことは院内のコミュニケーション向上に役に立つこととなった。③課題としては毎年100名以上の職員が入れ替わるため、新職員への教育の問題・業務を定められたPFC通りに行わないなどの不遵守の問題等山積みではある。今後ますます医療は複雑化し多様化していくと考えられている。そうであるからこそ「医療の質をシステムで保障する」ことが必要であると考える。

（国立病院機構　埼玉病院副院長　原彰男60回）